

保育現場における子どもの発達理解に関する研究 ～人物描画の発達過程を通して～

A Study of the Understanding of Children at Child Care Places ～Through the Developmental Processes as shown by Portrait Drawing in Early Childhood～

石岡 由紀*

<要旨>

Portrait drawing by children is an effective tool to ascertain a child's cognitive development. But in the present situation, the tool is not being used effectively in the child care environment.

So, the purpose of this research was to collect and analyze the portrait drawings by children and examine the tool's effectiveness.

The results, of the reserch show that portrait drawing improves as a child gets older. Moreover, this tool is so easy to use causes less stress for young children. So, it is thought that this tool can be effective for understanding the cognitive development in young children.

Key Words : portrait drawing early childhood cognitive development

I はじめに

近年、保育現場において、子どもの発達に関する話題が数多く取り上げられている。中でも、いわゆる発達障害が疑われる子どもへの対応に関しては、保育者研修などが数多く開催されるなど、その関心度の高さが報告されている。保育に携わる者にとって、目の前にいる子どもをどう理解し、どう対応するのかという課題は、永遠の課題であるといえよう。

発達に偏りがあると思われる子どもを理解するにあたっては、その子どもの発達特性を知り、適切に対応することが求められるのであるが、その基本的な姿として、いわゆる定型発達の子どもの発達過程を熟知しておくことが必要であると考えられる。

従来より、子どもの描画は、知能検査や性格検査等で、有効活用されてきた経緯があるが、本来有効的なツールである描画理解が、保育現場においてあまり効率的に活用されているとは言い難い状況にある。

特に、人物描画法は、子どもにとっても保育者にとっても、簡易で安価であり、実施するための負担感がなく取り組むことができる方法である。ただし、それをどう理解し、どう活用するのかということに関しては、現状においては、いささか問題の残るこ

とも事実である。

本研究では、小林らにより検討・標準化が行われた「グッドイナフ人物画知能検査ハンドブック」が39年ぶりに新刊されたこともあり、その基準をもとに、子どもの描画発達に関するデータ収集および分析することで、さらにはその活用方法について、保育現場において、保育者が子どもの発達を理解するためのツールとして人物描画の活用の有効性について検討することを目的とする。

II 方法

参加者

対象となったのは、H県内の幼稚園、保育園、こども園に在籍する男児121名、女児145名の計266名であった。対象児の内訳は表1のとおりである。なお、調査は2018年11月に実施した。

白描画用紙（縦27.0cm×横19.5cm）1枚と12色クレパス1箱を配置した。机の高さなどを配慮し、検査前のラポールを十分取るなどして、子どもが描画に集中できるよう環境を構成した。

子どもに配布した白描画用紙を指し示し「この紙に先生を描いてください。頭の前から足の先まで描いてくださいね。」といい、それ以外の指示は行わ

* 本学大学院教育学専攻教授

表1 対象児

月齢	男児 (人)	女児 (人)	計 (人)
3 6 ~ 4 7	12	26	38
4 8 ~ 5 3	15	26	41
5 4 ~ 5 9	25	23	48
6 0 ~ 6 5	22	26	48
6 6 ~ 7 1	18	19	37
7 2 ~ 7 7	29	25	54
	121	145	266

なかった。「全部描きおわったら『できた』といって教えてください。」と伝え、描き始めを指示した。

採点方法

採点項目と採点要綱は小林らによる『グッドイナフ人物画知能検査新版ハンドブック』の指示を基に行った。詳細は同著を参考されたい。ただし、本調査においては、黒鉛筆ではなく、ふだん幼児が使い慣れているクレパスを使用することにした。

Ⅲ結果

本稿においては、子どものグループを①生活年齢36か月～47か月、②生活年齢48か月～53か月、③生活年齢54か月～59か月、④生活年齢60か月～65か月、⑤生活年齢66か月～71か月、⑥生活年齢71か月～77か月の6グループにわけて構成した。各グループにおける平均得点を表したものが表2である。

表2 平均得点

月齢	男児 (人)	女児 (人)
3 6 ~ 4 7	12	26
4 8 ~ 5 3	15	26
5 4 ~ 5 9	25	23
6 0 ~ 6 5	22	26
6 6 ~ 7 1	18	19
7 2 ~ 7 7	29	25

①生活年齢36か月～47か月の子どもは、男児12名、女児26名の計38名であった。

このグループにおける男児の平均得点は4.92点で、50%以上の通過率を示した項目は、「頭」「眼」「口」「毛髪」であり、そのうち「頭」は92%、「眼」は83

%、「口」は75%と、75%以上の通過率を示した。「毛髪」の通過率は50%であった(写真1)。

一方、女児の平均得点は6.42点で、50%以上の通過率を示した項目は、同じく「頭」「眼」「口」「毛髪」であり、そのうち「頭」は89%、「眼」は89%と75%以上の通過率を示した。「口」「毛髪」の通過率はそれぞれ73%、69%であった(写真2)。

男女間に通過率の差はあったものの、この月齢グループにおいては、半数以上の子どもが「頭」「眼」「口」「毛髪」を描くことが可能であった。

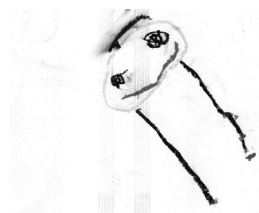


写真1 3歳9ヶ月男児

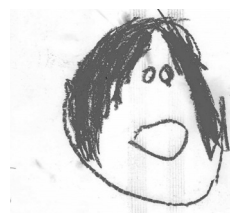


写真2 3歳6ヶ月女児

②生活年齢48か月～53か月の子どもは、男児15名、女児26名の計41名であった。

このグループにおける男児の平均得点は6.53点で、50%以上の通過率を示した項目は、「頭」「眼」「口」「毛髪」「胴」であり、そのうち「頭」は80%、「毛髪」80%と75%以上の通過率を示した。「眼」「口」「胴」通過率は全て73%であった(写真3)。

一方、女児の平均得点は9.3点で、50%以上の通過率を示した項目は、「頭」「眼」「口」「毛髪」「胴」「腕」「脚」であり、そのうち「頭」は96%、「眼」は100%、「口」は100%、「毛髪」は89%と75%以上の通過率を示した。「胴」「腕」「脚」の通過率はそれぞれ73%、50%、62%69%であった(写真4)。

男女間において、通過率の差はあったものの、この月齢グループにおいては、75%以上の子どもが「頭」「眼」「口」「毛髪」を描くことが可能であり、73%以上の子どもが「胴」を描くことが可能であった。



写真3 4歳3ヶ月男児



写真4 4歳4ヶ月女児

③生活年齢54か月～59か月の子どもは、男児25名、女児23名の計48名であった。

このグループにおける男児の平均得点は11.04点

で、50%以上の通過率を示した項目は、「頭」「眼」「口」「毛髪」「胴」「鼻」「胴の長さ」「脚」「手足のつき方」「衣服」であり、そのうち「頭」は96%、「眼」は96%、「口」は92%、「毛髪」は96%、「胴」は96%、「鼻」80%と75%以上の通過率を示した。「胴の長さ」「脚」「手足のつき方」「衣服」の通過率はそれぞれ60%、68%、56%、52%であった(写真5)。

一方、女兒の平均得点は14.2点で、50%以上の通過率を示した項目は、「頭」「眼」「口」「毛髪」「胴」「腕」「脚」「鼻」「胴の長さ」「手足のつき方」「衣服」であり、そのうち「頭」は100%、「眼」は100%、「口」は100%、「毛髪」は100%、「胴」91%、「腕」83%、「脚」91%、「鼻」83%、と75%以上の通過率を示した。また「胴の長さ」「衣服」の通過率はそれぞれ56%、61%であった(写真6)。

男女間において、通過率の差はあったものの、この月齢グループにおいては、75%以上の子どもが「頭」「眼」「口」「毛髪」「鼻」「胴」を描くことが可能であり、「腕」「脚」「衣服」などを描く子どもが増えるなど、身体全体をとらえることができるようになっていたが、依然として手や足が、一本の線で描かれている場合も多い。



写真5 4歳8ヶ月男児



写真6 4歳10ヶ月女児

④生活年齢60か月～65か月の子どもは、男児22名、女児26名の計48名であった。

このグループにおける男児の平均得点は13.2点で、50%以上の通過率を示した項目は、「頭」「眼」「口」「毛髪」「胴」「鼻」「胴の長さ」「脚」「腕」「手足のつき方」「衣服」「耳」であり、そのうち「頭」は100%、「眼」は100%、「口」は100%、「毛髪」は100%、「胴」は96%、「鼻」77%、「腕」92%、「脚」89%、「手足のつき方」92%と75%以上の通過率を示した。「胴の長さ」「衣服」の通過率はそれぞれ64%、73%であった(写真7)。

一方、女兒の平均得点は16.4点で、50%以上の通過率を示した項目は、「頭」「眼」「口」「毛髪」「胴」「鼻」「腕」「脚」「胴の長さ」「手足のつき方」「衣服」であり、そのうち「頭」は100%、「眼」は100%、

「口」は100%、「毛髪」は100%、「胴」は96%、「鼻」は77%、「腕」92%、「脚」89%「手足のつき方」は92%、「衣服」は89%と75%以上の通過率を示した。「胴の長さ」の通過率は69%であった(写真8)。

男女間において、通過率の差はあったものの、この月齢グループにおいては、75%以上の子どもが「頭」「眼」「口」「毛髪」「鼻」「胴」「腕」「脚」「衣服」を描くことが可能となっている。「耳」を描く子どもが男児で73%出現している。



写真7 5歳1ヶ月男児



写真8 5歳2ヶ月女児

⑤生活年齢66か月～71か月の子どもは、男児18名、女児19名の計37名であった。

このグループにおける男児の平均得点は16.6点で、50%以上の通過率を示した項目は、「頭」「眼」「口」「毛髪」「胴」「鼻」「胴の長さ」「脚」「腕」「手足のつき方」「衣服」「耳」であり、そのうち「頭」は100%、「眼」は100%、「口」は100%、「毛髪」は100%、「胴」は100%、「腕」は94%、「脚」は89%、「手足のつき方」は89%と75%以上の通過率を示した。「鼻」「耳」の通過率はそれぞれ61%、56%であった(写真9)。

一方、女兒の平均得点は20.7点で、50%以上の通過率を示した項目は、「頭」「眼」「口」「毛髪」「胴」「鼻」「腕」「脚」「胴の長さ」「手足のつき方」「衣服」「眉または睫毛」「胴の輪郭」「腕の割合」であり、そのうち「頭」は100%、「眼」は100%、「口」は100%、「毛髪」は100%、「胴」は100%、「腕」100%、「脚」100%「胴の長さ」は100%、「手足のつき方」は100%、「衣服」は100%の通過率を示し、「胴の輪郭」も84%の子どもが描けるようになった。「鼻」「眉または睫毛」「腕の割合」の通過率はそれぞれ68%、63%、53%であった(写真10)。

男女間において、通過率の差はあったものの、この月齢グループにおいては、「頭」「眼」「口」「毛髪」「胴」「腕」を全員の子どもが描くようになっていた一方で、「鼻」や「耳」を描いていない子どももいる。

表3 通過率

	36～47ヶ月		48～53ヶ月		54～59ヶ月		60～65ヶ月		66～71ヶ月		72～77ヶ月	
	男 児	女 児	男 児	女 児	男 児	女 児	男 児	女 児	男 児	女 児	男 児	女 児
頭	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
眼	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
口	◎	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
毛髪	○	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
胴			◎	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
脚				○	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
腕				○		◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
手と足のつき方					○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
胴の長さ					○	○	○	○	◎	◎	◎	◎
衣服					○	○	○	◎	◎	◎	◎	◎
鼻					◎	◎	○	◎	○	○	○	○
耳							○		○		○	◎
衣服2つ以上									○	○	○	◎
眉または睫毛												○
首												○

◎75%以上の通過率 ○50%～74%の通過率



写真9 5歳7ヶ月男児



写真10 5歳11ヶ月女児

⑥生活年齢72か月～77か月の子どもは、男児29名、女児25の計54名であった。

このグループにおける男児の平均得点は16.6点で、50%以上の通過率を示した項目は、「頭」「眼」「口」「毛髪」「胴」「鼻」「胴の長さ」「脚」「腕」「手足のつき方」「衣服」「耳」であり、そのうち「頭」「眼」「口」「毛髪」「胴」は100%、「腕」は94%、「脚」は89%、「手足のつき方」は89%「衣服」86%と75%以上の通過率を示した。「鼻」「耳」「衣服2つ以上」の通過率はそれぞれ52%、55%、72%であった(写真11)。

一方、女児の平均得点は22, 24点で、50%以上の通過率を示した項目は、「頭」「眼」「口」「毛髪」「胴」「鼻」「耳」「腕」「脚」「胴の長さ」「手足のつ

き方」「衣服」「眉または睫毛」「胴の輪郭」「腕の割合」であり、そのうち「頭」「眼」「口」「毛髪」は「胴」「腕」100%、「脚」「胴の長さ」「手足のつき方」「衣服」は100%の通過率を示し、「胴の輪郭」84%「耳」も76%の子どもが描けるようになった。「鼻」「眉または睫毛」「腕の割合」の通過率はそれぞれ72%、56%、52%であった(写真12)。



写真11 6歳2ヶ月男児



写真12 6歳4ヶ月女児

IV 考察

表3で示すように、各項目とも、ほぼ月齢が上昇するとともに通過率が上昇しており、人物描画が幼児期における子どもの認知発達的一面を表しているということが確かめられた。細部においては隣接するグループ間で通過率の逆転が起こっているが、その一方で、子どもの認知発達を把握するための大ま

かな項目の特定が可能となると考えられる。

例えば、「鼻」や「耳」の表出に関しては、比較的月齢の低いグループで表出が見られるのに対して、月齢の高いグループで通過率が下がるという現象が見られている。この理由に関しては、さらなる検討が必要になるのではあるが、考えられる理由としては「わかっている、うまく表現することができない」「眼や口ほどに認知されにくい」「ふだん目につきにくい（耳）」などが考えられる。

上記のことから、3歳代の子どもは、「頭」「眼」「口」の表出、4歳前半の子どもは、「頭」「眼」「口」「胴」の表出、4歳後半の子どもは「頭」「眼」「口」「毛髪」「胴」「腕」「脚」の表出が可能となる。5歳前半の子どもは上記の項目に加え「鼻」「耳」「衣服」など細部の表出や「腕」や「脚」の輪郭の表出が可能となる。5歳後半になると、「胴の長さ」「腕の割合」などボディイメージがさらに明確化され、6歳代になると着用している衣服や髪形などにも注目し、それを表出することが可能となっていることが明らかになった。

上記してきた特性を保育者が熟知し、子どもの人物描画を見ることで、子どもの認知発達を客観的に把握する一助になるものと考えられる。

さらに、この人物描画は、日常使用する物以外は不必要であり簡易であること、また対応時間も短いこと、そして何よりも子どもにとっての負担感が少ない（むしろ子どもが好むあそびの一つである）ことを鑑みると、保育現場でもっと積極的に導入されるべきではないかと考える。

おわりに

今回の調査では、子どもたちの描く先生（保育者）像は、明るく楽しそうに表現されているものが多かった。描きたくない場合は、参加をしないことも許される場面の中、声をかけた子どもたちは、全員がこの作業に取り組むことができたことは、この活用法が、保育現場で使用されやすいツールであることを示唆しているものと思われる。

ただ、その一方で、子どもの描くものを単に点数化し、その子どもの発達の様相をわかったつもりになるという状況は、絶対に避けなければならない。

近年、発達に偏りのある子どもへの対応は、保育現場のみならず社会全体で取り組まなければならない大きな課題であるといえよう。そのためには、その子どもの発達をよりの確に把握し、理解する姿勢

が求められるところにある。発達障害における「早期発見」の必要性は、「診断名」をつけることが目的なのではなく、早期にその子どもの発達の偏りを発見することでその子どもの困難さや生きづらさを理解し支援する姿勢が求められているからである。「診断名」がつくことで、その子どもを理解したつもりになり、本来求められる適切な対応がなされないというのであれば、本末転倒と言わざるをえない。

子どもを目の前にした場面において、その子どもが今「わかっていること」や「わかりづらいこと」を理解する手立ては必要であると考えられる。この人物描画はその一助になるものとして、多くの保育者に理解と使用を勧めたいと考えている。

また、人物描画における得点化は、子どもの人への関心や認知を測る物差しの1つであることは明らかであるが、それ以外にも、その子どもの生活感覚も同時に表現されているものである。この問題においては、本稿で触れることはしなかったが、今回改定されたグッドイナフ人物画知能検査（Draw-A-Man-Test）における得点と発達年齢（MA）との比較とともに、次稿に譲ることとする。

今後は、より多くの子どもの人物描画を収集、分析することで、保育現場における、子ども理解が進むことを期待している。

参考文献

- 高橋省己（1968）『ベンダー・ゲシュタルト・テスト・ハンドブック』三京房
- 小林重雄編（1989）『グッドイナフ人物画知能検査の臨床的利用』三京房
- 島津峯眞・生澤雅雄（1985）『新版K式検査法』ナカニシヤ出版
- 山口俊郎（1999）「Santucchiの4歳児の描画検査（検査紹介・訳）兵庫教育大学学校教育実践センター障害児教育実践研究6号
- 石岡由紀（2003）「幼児における図形模写能力の発達」九州ルーテル学院大学発達臨床センター年報2号
- 石岡由紀（2007）「幼児における人物描画能力の発達」神戸親和女子大学『児童教育学研究』第26号『教育専攻科紀要』第11号
- 細木玉恵・石岡由紀（2011）「後半生発達障害児の表現活動に関する一考察—描画活動を通じて—」神戸親和女子大学大学院研究紀要第7巻
- 石岡由紀（2012）「幼児における図形模写能力の発

達Ⅱ」神戸親和女子大学教育研究センター紀要第8巻

石岡由紀・Elizabeth Morley (2016) 『A Study about Figure Copying Ability in Young Children Through Case Studies of children in Canada』

小林重雄・伊藤健次 (2017) 『グッドイナフ人物画知能検査新版ハンドブック』三京房